

大分県自閉症・発達障害支援センター「イコール」から

センター長 五十嵐猛

平成 17 年 2 月 1 日、社会福祉法人萌葱の郷が大分県からの委託を受け、自閉症者施設めぶき園地域交流ホーム内に支援センターを開設しました。当法人は、平成 14 年から県の協力を得て定期的に相談会や講演・研修会等を行ってきており、年々増加するニーズに対して、よりきめ細かな対応と支援の輪が必要とされていることを実感しています。

私たちは、大分県内唯一の自閉症専門施設として、これまで 14 年間にわたって処遇困難に至った様々な事例に関わり、自閉症児者がライフステージを通じて一貫した支援を受けることの必要性を痛感してきました。そして、支援者側の姿勢として、チームの共通認識や、柔軟性のある対応、そして何よりも「支援者」として認められるような信頼関係を彼らとの間に築くことの大切さについても、実践の中で学んできており、今後は、こうして培ってきたノウハウを各機関の支援者に提供していくとともに、連携を通しながら様々な情報の交換・集約を行い、支援のネットワーク化に貢献していきたいと考えています。

先日、第一回の連絡協議会を開催したところ、関係機関から、思春期・青年期を迎えて家庭内暴力や不登校等によって家庭生活が崩壊してしまうといった深刻な事例が少なくないとの報告を受けました。めぶき園でも、同じような事例をショートステイで何度か受け入れてきましたが、当園で問題行動が改善されても、その後の受け入れ先が無いために長期化しており、新たなニーズを受け入れる余裕がありません。一般の知的障害施設においても、1対1以上の職員対応や高度な専門性が求められること、ショートステイの支援費単価がビジネスホテルの宿泊費程度しかないこと等から、どこも受け入れにくいのが現状のようです。その一方で、幼児期や学童期についての専門機関や学校の制度等は整備されつつあるのですが、そこで関わる方の多くが自閉症・発達障害に関しての専門性やライフステージを通じた視点を持たないこと、思春期以降の対応ができる専門機関や専門家が少なく等から、問題行動等でこじれた事例についての多くは、未だに手付かずのままになっています。こうした大分県の実情をふまえて、今後は思春期・青年期以降の方々への支援を充実するための施策や、自閉症・発達障害に関する専門家の養成について重点的に検討することになり、関係機関による連携を一層深めていくことを約束しました。

(社団法人日本自閉症協会 いとしご No.93 2005.7.8 掲載)